令和４年２月１０日

令和３年度　学校経営評価報告書（２次案）

大玉村立大山小学校長　舘脇　一弘

学校関係者評価委員長　小椋　　伍

１　目指す学校の姿

（１）子どもが生き生きと学ぶ学校
（２）子ども・教職員・保護者が共に育つ学校
（３）安全・安心で、笑顔があふれる学校
（４）家庭・地域と連携・協働し、地域とともにある学校

２　設定した重点目標（中期目標）

（１）「進んで学習する子」（学び続ける人）
（２）「なかよく助け合う子」（共に生きようとする人）
（３）「健やかでたくましい子」（心身を鍛える人）

３　重点課題の取組状況

（１）進んで学習する子（学び続ける人）		達成状況	取組の適切さ	改善の視点
重点目標（中期目標）	◎進んで学習する子の育成 【「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業づくり】 【学びを支える学習基盤づくり】	B	B	継続発展
実践事項（短期目標）	・　発問の工夫をすることで、児童の思考を深められるようコーディネートする。	B	B	継続発展
	・　相手意識を明確にした「聴く」「話す」「書く」活動を学習場面に効果的に位置付ける。	B	A	継続発展
	・　「問題を見つける」→「しらべる」→「まとめる」学習過程を取り入れ、自ら解決していく学習体験を積み重ねる。	B	A	継続発展
	・　協働的に問題を解決していく過程を大切にし、「友達と学ぶ」「友達から学ぶ」学習態度を育てる。	B	B	継続発展
	・　『家庭学習の手引き』等に基づき「何を」「どのくらい」「どのように」取り組むかを指導し、家庭学習の内容の充実を図る。	B	B	継続発展
	・　多様なジャンルにふれ、視野(世界)を広げる読書活動を推進する。	A	B	継続発展
結果分析と改善の方策	現在求められている「主体的・対話的で深い学び」による授業改善は、子どもが自ら課題を見出し、解決までの見通しをもち、調べたり話し合ったりしながら子ども同士が協働し、納得解をもつ授業である。 本校においても「子どもがともに学び育つ」ための授業を目指し、子どもの			

考えが子ども同士でつながり、それらを比較検討しながら自分の考えを深め、真に生きて働く力につながるよう、授業者が子どもの思考をつなぎ深める「コーディネート」を重視して指導にあたってきた。

校内の職員研修においては、１４学級の全担任で国語科・外国語科・算数科・道徳科の研究授業を実施し、本校授業研究の視点である「教材との出合いの工夫」「他者（友達・教師）とのかかわりの充実」「自己変容を自覚するための振り返りの充実」の３つの視点に基づき、授業改善に取り組んできた。このことにより、子どもが課題の把握や解決までの見通し、そして何を学んだかを自覚できるような授業改善が図られてきた。また、Google Chat を使って互いの授業の様子を画像等で共有することにより、オンラインでの互見授業ができ、職員の授業力向上を図ることができた。

家庭学習については、村及び本校の手引きを活用し、学年の実態に合わせて、課題を出してきたことにより、家庭学習が定着してきている。今後も量と質を考えながら、一人一人の実態に応じた内容・方法を見直し、継続した取組ができるようにしていきたい。

【学校評価アンケート（R02→R03 の比較）】

（Ａそう思う　Ｂどちらかといえばそう思う）の合計

1「授業が分かったと感じている」

（保護者 86％→86％）（児童 97％→95％●）

5「友達とともに学習したり、友達から学んだりしている」

（保護者 85％→92％○）（児童 90％→93％○）

6「進んで家庭学習に取り組んでいる」

（保護者 66％→74％○）（児童 86％→95％○）

金曜日の朝の１０分間を読書タイムとし、全学年で読書に取り組む時間を確保してきた。また学校司書やサポートティーチャーを活用し、校内での読書環境整備や、ボランティアまたは職員による読み聞かせなど、多様なジャンルの読書活動の推進、家庭での読書の習慣化を目指した取組を行ってきた。11 月には読書月間として重点的に読書活動を促してきたところ、月の平均読書冊

	数が約 16 冊（昨年度は 14 冊）となっている。 【学校評価アンケート】（R02→R03） **8「学校や公民館から本を借り、進んで読書活動をしている」** （保護者 44%→54%○）（児童 70%→77%○） 【全校児童貸出冊数】（12 月現在　R02→R03） （14.3 冊→16.3 冊） 読書活動の充実のためには「読みたい本が読める環境」と「じっくり読める時間」の影響が大きいと考えている。現在スマートフォンやタブレット、テレビゲーム使用の長時間化や低年齢化が進んでいることから、次年度は、メディアとの関わり方の指導について、今年度実施している「メディアコントロールデー」の実践と関連させながら、家庭との連携を一層密にし、読書活動に「進んで」臨むという目的を明確にした取組を継続していきたい。また、日課表を見直し、朝の読書時間を増やすなどの環境整備も進めていきたい。

学校関係者評価　（１）進んで学習する子

意　　見	自己評価の適切さ	改善に向けた取組の適切さ
・　授業の中で不明なところを辞典や辞書を活用して学習するともっと勉強になるのではないかと思う。 ・　英語は社会人でも使用することが多いので、英語の授業をもっと取り入れてもよいと思う。 ・　学校や先生方はコロナ禍の中でやれること、できることをとても考えて授業をしている。あとは、家庭が自らの役割をどのように果たしていくのかにかかっている。特に１・２年生のうちの家庭での役割は大きいので、それをもう少し保護者に発信してもよいのではないか。宿題を見たり、声かけをしたり、学習は学校だけでは成り立たないことを低学年のうちに親も理解してほしいと考える。	A	A

・　毎年課題となっている読書活動の達成状況が今年度はＡとなっていた。アンケートなどからも進んで読書活動に取り組んでいると思う。 ・　家庭学習が定着している。 ・　授業の準備がよくされていて、目標（めあて）の提示や学習内容を分かりやすく説明しての発問など、子どもの学習意欲を高める指導をされていることは素晴らしい。それによって子どもの発言なども大きく変わってくる。学習することの楽しさをもたせる指導を追求してほしい。		

（２）なかよく助け合う子		達成状況	取組の適切さ	改善の視点
重点目標 （中期目標）	◎なかよく助け合う子の育成 【道徳教育の充実】 【生徒指導の充実】 【体験活動の充実】	B	B	継続 発展
実践事項 （短期目標）	道徳教育について学校の重点目標や方向性について共通理解し、授業の充実に努める。 ・重点目標の設定　・方向性の明確化	B	A	継続 発展
	道徳の授業年間３５時間の確保と多様な指導方法の工夫に努める。 ・量の確保　・質の改善 （読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習、問題解決的な学習、道徳的行為に関する体験的な学習等） ・授業スタンダードの活用 ・人権フィルターの活用	B	B	継続 発展
	好ましい人間関係を築く協調性や自立して生きるための生活の基礎力の指導に努める。 ・生活体験を豊かにする ・好ましい人間関係づくり ・規範意識の醸成 ・実態の把握（観察、調査等）	B	B	継続 発展
	いじめや学校不適応の未然防止、早期発見、適切な対応に努める。 ・元気になるアンケート・教育相談 ・組織的な事案対処 ・学校いじめ防止基本方針の共通理解 ・日常観察・欠席状況把握	B	B	継続 発展
	地域素材（ひと・もの・こと）の活用を通して、自己と身近な社会との関わりについての考えを広げたり深めたりできる指導に努める。 ・見学学習・各種体験活動	B	A	継続 発展
	思いやりの心や規範意識、協調性、責任感、感性等の豊かな人間性を育む指導に努める。 ・自然教室・修学旅行・ふれあいタイム	B	B	継続 発展

結果分析と改善の方策	今年度の村並びに本校の指導の重点事項は「親切・思いやり」と「努力と強い意志」をもつことである。このことを受けて、学校行事や研究授業等を通して豊かな心の育成を目指してきた。 【学校評価アンケート（Ａ・Ｂ評価の合計）】（R02→R03） **9「進んで親切にしている」** （保護者 94%→84%●）（児童 90%→92%○） 19「目標やめあてに向かって、粘り強く努力している」 （保護者 75%→73%●）（児童 87%→94%○） 今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、同学年または異学年の交流が一部制限されたが、生活科を中心とした１・２年生の交流学習や４年生の十二神楽学習、そして５年生で今年度新たに実施した村内での自然教室等、多様な他者との関わりの中で自分を見つめ直すとともに、他者を理解し、尊重し、感謝する機会をもつことができた。 次年度も、今年度の実践をもとに、子どもが自己肯定感をさらに高められるよう、他者のために役立てるような場面の設定、そして教師が子どもに寄り添いながら、行動をつぶさに見取り価値付けしていく中で、目標に向かって努力することの価値を身に付けさせていきたい。 昨年度、教員による反省として、人権フィルターの活用が年度初めや学期初めのみとなっているという課題が出された。そこで、今年度は人権フィルターを職員間で確認し、各学期に児童に指導する時間を設けて取り組んだ。しかし、人権意識の向上は村の重点事項でもあることから、来年度は村の人権擁護委員を招へいして校内研修を行うなど、質的向上を図っていきたい。 学級内の人間関係や居心地のよさを客観的に把握できる hyper-QU テストを年２回実施することにより、よりよい学級集団づくりに努めてきた。各学級の傾向は、学期末に傾向と対策をまとめたり、村の QU 研修会に参加したりするなどして教員の学級経営力の向上に努めることができた。また、今年度も「学級経営交流会」を３回実施し、各学級の学級経営についてベテランと若手教員が情報交換する機会を設け、学級経営を充実させる手立てを講じ

	ることができた。 【学校評価アンケート（Ａ・Ｂ評価の合計）】（R02→R03） 10「自分のよいところがわかっている」 （保護者 80%→96%○）（児童 85%→81%●） 11「友達のよいところがわかっている」 （保護者 99%→96%●）（児童 97%→96%●） 今年度も学級担任を中心とした日々の観察に加え、「元気になるアンケート」を月１回実施し、児童の実態を的確に把握し、問題発生時には全職員で迅速に情報共有を図るなど早期に解決の見通しを立ててきた。また、アンケート用紙に教員の対応を記載し、管理職と情報共有することで組織的に対応することができた。さらに１１月には教員と児童の個別懇談を実施し、一人一人のよさを個別に認め励まし、児童の内面に抱える悩みの相談の場も継続して実施してきた。１２月には保護者と個別面談を実施し、児童の様子について多面的に把握するとともに、保護者との協力体制を構築することができた。 【困りごとアンケートによるいじめ見逃し０】 【不登校児童１名】（昨年度より） 次年度も今年度の取組を継続し、各種調査やアンケートを有効に活用しながら、全教職員の協力体制の下、児童一人一人に寄り添った指導を行い、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を講じながら体験活動や交流活動を重視した計画を作成し、実践を積み重ねていきたい。

学校関係者評価　（２）なかよく助け合う子

意　　見	自己評価の適切さ	改善に向けた取組の適切さ
・　いじめを０にすることはなかなか難しいと思う。いじめが起きないようにすることが大事だと思う。授業の中で定期的にグループ協議などを行い、子どもたちのコミュニケーションを図る取り組みを進めてほしい。	A	A

・　体験活動においては、色々な制限のある中、とても工夫してできていると思う。学校の外の大人との関わりは、子どもたちをとても成長させてくれていると感じる。 ・　中学年、高学年の子どもたちには、もう少しだけ自己をコントロールできる術を身に付けてほしいと思う。 ・　正しいことを普通にできている子どもがいづらくならないような学校にしてほしい。 ・　地域素材の活用は、地域で子どもを育てる人材の育成につながる。 ・　学級経営交流会は、先生同士の情報交換に有効と考える。 ・　教師や子どもたちがお互いに受け入れられていることが、なかよく助け合う子どもたちへの生活につながるのだと思う。そのような信頼関係は管理職をはじめ、全教職員の日常の子どもたちとの関係の中で培われ、子どもたちに安定した心情をもたらすものと思う。今後とも一人ひとりの子どもに寄り添った指導をお願いしたい。		

（３）健やかでたくましい子		達成状況	取組の適切さ	改善の視点
重点目標 （中期目標）	◎健やかでたくましい子の育成 【やり抜く心の育成】 【健康・安全教育の充実】	B	B	継続 発展
実践事項 （短期目標）	・　教科体育や様々な活動への取組に際し、目標やめあてをもたせて課題に向かって取り組ませ、その達成の支援・評価の充実を図る。 （運動身体づくりプログラム、新体力テスト、業間マラソン等各種体育行事への取組）	B	B	継続 発展
	・　年間を通して業間や昼休み、家庭で自主的に体力づくりに取り組めるように、家庭と連携して習慣化を図る。（学年だより、懇談会での啓発）	B	B	継続 発展
	・　基本的生活習慣（早寝・早起き、歯磨き、朝ごはん、ゲーム等）の実態を把握し、家庭と連携してよりよい習慣化を図る。 （清潔検査、メディアコントロールデーの実施）	B	B	継続 発展
	・安全教育（防災教育、放射線教育を含む）を推進し、発達段階に応じた危険予知能力、危険回避能力が身に付くように具体的に指導する。	B	B	継続 発展

結果分析と改善の方策	昨年度の反省である「肥満傾向児童の削減」を目指して、養護教諭が中心となり、様々な取り組みを行ってきた。年度初めには、６年生全児童を対象に養護教諭による個別の健康相談を行い、食習慣や運動週間などについて児童一人一人に合わせた指導助言を行うことができた。このことにより、６年生の肥満傾向が改善されるようになった。また、おおたま学園保健教育委員会で企画した「ファーストかみかみ３０」という食事の一口目を３０回かむ習慣化を図る取組を村内全校園で実施した。児童や保護者からアンケートを集計したところ、両者共に高い評価を得ることができた。 次年度もこれらの実践を継続・発展して取り組むことにより「動ける身体」「動きたくなる身体」「望ましい食習慣と生活習慣」を目指しつつ、健康への意識を引き続き高めていきたい。 【学校評価アンケート】 18「体育の学習や運動が好きである。」 （保護者 83%→83%）（児童 88%→89%○） 早寝・早起き・朝ごはんの基本的生活習慣については、学年だよりや保健だより等を活用して学校と家庭が連携して取り組んだ成果が出ている。しかし、ゲームの利用については、おおたま学園での取組と関連を図りながら、メディアコントロールデーを年３回実施してきたが、節度のある使用に関して保護者による評価が低くなっている。家庭生活に関わる部分であることから、保護者の協力を得ながら改善できるよう、次年度も継続して本項目に取り組んでいきたい。 【学校評価アンケート】（R02→R03） 21「テレビやゲームは、約束を守って見たりしたりしている」 （保護者 62%→66%○）（児童 81%→96%○） 「自分の命を自分で守る」意識と実践力を高めるために、安全教育並びに防災・放射線教育の取組を進めることができた。学校施設の安全管理についても、毎月 1 日を安全点検の日と位置付け、全職員で共通認識を図りながら、重層的な点検を行ってきた。昨年度は、遊具の使用による骨折等のけが

	が複数見られたが、今年度は同様のけがは発生しなかった。学校評価アンケート結果等からは高い評価を維持することができているが、児童に対し今後も安全意識を高める指導を引き続き行うとともに、職員間でも連携を図りながら、学校施設の安全点検を徹底していきたい。 【学校評価アンケート】（R02→R03） 22「安全に行動しようと、いつも考えて行動している。」 （保護者 89%→90%○）（児童 90%→94%○）

学校関係者評価　（３）健やかでたくましい子

意　　見	自己評価の適切さ	改善に向けた取組の適切さ
・　昔に比べると眼鏡の子どもが多い気がする。スマホやタブレットが原因だとすれば、保護者にも協力してもらう必要がある。 ・　健康や心のケアなど、養護教諭をはじめ先生方がとても気を遣っていることが分かります。学習面での話とも重なるが、基本的な生活習慣は家庭での役割がとても大きいので、保護者に対してのアプローチをもう少し進めてもよいのではないかと思う。 ・　肥満傾向児童の減少と体力づくりに取り組んでほしい。 ・　コロナ禍が続く中で、伸び伸びと子どもたちが活躍しにくい状況はかわいそうでもある。それが影響しているのか、子どもたちの運動能力の低下も報じられているのは、育ち盛りの子どもだけに心配である。安全に運動をしなさいと子どもたちに言うだけでなく、できれば先生方と精一杯遊ぶ時間もほしいと思う。しかし、忙しい先生方には無理なお願いかもしれない。	A	A

４　学校関係者評価委員会の全体意見

学校関係者評価　（全体意見）
・　大山小学校の児童は素直でよいと思う。あいさつや礼儀など人間として常識的なことをもっと教えていけば、将来につながると思う。コロナ禍で行事等の規模の縮小、中止になったイベントが多くてかわいそうだと思った。体育館で映画の上映などを行うなど、イベントを増やして子どもたちの楽しみを増やす取り組みもよいのではないか。 ・　このコロナ禍において、色々な行事の変更や中止があったが、学校として子どもたちのためにできることや様々な体験の機会を設けていただいたことに感謝したい。先生方も少ないぎりぎりの人数で子どもたちの対応をすることは、大変だと思う。何もトラブルのない日などない毎日だと思うが、少しでも子どもたちのためになるようにという雰囲気が伝わる。今後も応援したい。 ・　今年度も、コロナに振り回された１年だったが、昨年同様に先生方は知恵を出し合い、工夫して子どもたちと向き合っていた。本当に大変だと思うが、今後も子どもたちをよろしくお願いしたい。 ・　コロナ禍など異常な状況が続く中で、先生方は校長の指導の下、しっかりと課題に取り組んで指導されている。これからも大山小学校の子ども全体を教職員全体で受け止め、一人ひとりの子どもに寄り添った指導をお願いしたい。

５　総括評価

（１）「進んで学習する子」について

「自ら考えともに学び育つ子どもを育てる」をテーマに、上記項目の実践を目指し年間を通して 14 学級全教員で研究授業を実施し、目指す授業について研修を重ねてきた。その結果、多くの児童に授業が「わかった。できた。」という思いをもたせることができるようになってきた。次年度は、児童一人一人の問いや思い・願いを引き出す魅力的な授業となるよう、児童同士の考えがつながり、思考を深め納得解を得ることができるための教員のコーディネート力の向上を目指していきたい。

（２）「なかよく助け合う子」について

「自他の生命を大切にし、人権を尊重する心を育てる」ことを目標に、各種調査やアンケート等を計画的に実施したことにより、児童や保護者の実態を把握した上で組織的な対応を図ることができた。また、児童一人一人が抱える悩みや課題を全職員で把握し、いじめの積極的認知や新たな不登校を未然に防止することができた。次年度は、児童一人一人の自己肯定感がさらに高まるよう、今年度から始めた学級経営交流会を充実させながら、今年度の取組を継続、発展させたい。

（３）「健やかでたくましい子」について

「健やかでたくましい子」の育成に向けて、健康安全教育を家庭や地域と連携しながら充実を図ってきた。体力面では、体育科や行事への取組においてめあてを明確にもた

せ年間を通して継続して運動に取り組ませたことにより、運動が好きな児童を育むことができた。健康面では、基本的な生活習慣の定着をねらいとして、児童との健康相談や「ファーストかみかみ３０」など家庭との連携を重視しながら実践を積み重ねることができた。次年度は、体力向上や肥満傾向の改善、危機回避能力の向上に向けて継続的かつ計画的に取り組んでいきたい。

保護者の学校評価アンケートからは、２３項目中１８項目（昨年度は１９）において平均３（７５％)以上の高い評価（全評価項目平均３．３）を得ることができた。多くの取組において、本校の教育活動への理解及び、成果を認めていただけたと捉えることができる。今後さらに、保護者の方による評価が低い４項目（学習の約束 76%・家庭学習 74%・読書活動 54%・ゲームの時間 66%）について、改善が図られるよう手立てを講じていきたい。

今年度は新型コロナウイルス感染症による影響が大きかったものの、感染拡大防止対策を講じながら、５年生の村内自然教室、ｉＰａｄを使ったリモート授業、Ｚｏｏｍを使った全校集会など新しい取組を実施することができた。これからの世の中は予測不可能な社会とも言われているが、今後も「今できることを着実に」「どうすれば実現できるかを考えながら」職員が一丸となって、夢に向かって未来を切り拓く児童の育成に向けて取り組んでいきたい。

＜判　断　基　準＞

１　自己評価の判断基準

○　達成状況（Ａ：目標達成　Ｂ：ある程度達成　Ｃ：もう少し　Ｄ：できなかった）

○　取組の効果

（Ａ：効果的である　Ｂ：ある程度効果的である　Ｃ：あまり効果が見られない　Ｄ：効果がないので、別の取組が必要である）

２　学校関係者評価の判断基準

○　自己評価の適切さ（学校関係者評価委員会との認識のズレがないか）

（Ａ：適切である　Ｂ：ほぼ適切　Ｃ：やや不適切　Ｄ：不適切）

○　改善に向けた取組の適切さ

（Ａ：十分な効果が期待できる　Ｂ：ある程度期待できる　Ｃ：あまり期待できない　Ｄ：期待できないので、別に改善策が必要）

３　改善の視点

定着：成果の上がっている事項やよい点について、取組みの定着により、重点的取組から外す。

継続・発展：成果の上がっている事項やよい点を発見し、その要因を明確にして、次年度、さらに継続・発展させるための方途を明確にする。

新規導入：成果を踏まえ、明らかになった課題に向けて新しいことを導入する。

見直し：成果の上がらない事項について、要因を究明しどのように見直すか提案する。

廃止：予想に反して成果の上がらない場合、思い切って廃止する。